

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(20) 平成13年4月1日

農政・救荒シリーズ

郷土の救荒書 『遠州救荒小録』(Q611-17)

初代県知事関口隆吉は救荒書・農書関係を広く集めており、彼のコレクションを受け継いだ当館久能文庫には79種の農業関係書物(Q610,Q611)があります。その中の実に7割近くが救荒書およびそれに類するものです。

『遠州救荒小録』は、数少ない郷土の実態を記した資料で、県西部の引佐郡における天保7(1836)年の飢饉の実状を、おおよそ50年後の明治18(1885)年頃にまとめたものです。「天保七年風災のため飢饉に困むの惨状御尋問の所患老十五歳にして其如何を充分弁知すると雖共其概略を陳述すべし」と記されているように本書は村の古老から飢饉の惨状などを聞き記し、各戸長から引佐・麗玉郡長松島吉平(後の松島十湖)へ上申したものをまとめたものです。このため飢饉に備える知識を広め、農民救済を図るというそれまでの純粋な救荒書とは異なり、飢饉調査報告書ともいべきものです。

明治10年代後半の不況において、農民は没落し、生活に苦しむ農民は増加の一途をたどります。このような情勢に政府は老農・資産ある名望家という農業経営に成功し地主の地位を固めたものを軸に地域社会や村落の支配の安定を図ろうとしました。明治18(1885)年5月政府は勤勉と貯蓄をもって不況に対処することを柱とする「済急趣意書」を官報に掲載しました。そしてこの趣旨の徹底を図るため東海地方に派遣された農商務省大書記官前田正名は、8月7日に引佐郡所に出張し、気賀村で老農有志十余人と懇談しました。『遠州救荒小録』はこのような時代背景の中で成立したものです。

『遠州凶荒小録』に記された天明・天保の飢饉に関する記述をまとめると次のようになります。天保7(1836)年の飢饉の原因は、5月からの長雨と8月13日の暴風雨による風害・水害さらに暴風雨が運んだ塩分です。特に、台風が巻揚降りつけた塩分により「気賀村より以北諸山枯涸して」と言う状況で、「汐風飢饉」と伝えられていました。諸物価は軒並み高騰し、米は前年の天保6年「米価壱升百文」から「米価壱升貳百六拾文」と、前年比2.6倍の高騰となりました。また、天明の飢饉は、「天保の凶荒に比する三層猛烈なる惨苛」と伝えられていることを記してあります。

参考資料

- 「前田正名の静岡県下巡回」海野福寿
『静岡県史研究第5号』(S220/17)
- 『静岡県引佐郡誌』(S235/1)
- 『引佐町史下巻』(S235/21)
- 『飢饉』(211.8/51)

『遠州救荒小録』における飢饉の原因の部分